

メータオ・クリニック支援の会 (JAM) 会報メール 第26号 [2010年11月号]

メータオ・クリニック支援の会 (JAM) 支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。
JAM 会報メール第26号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ/ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へ JAM の最新の活動を毎月中～下旬ごろ、会報メールにて発信いたします。
今後ともどうぞよろしく願いいたします。

<目次> [ページ]

ミャンマー/ビルマ難民 緊急救援基金開設のお知らせ	[2]
シンシア先生の本 発売中!	[3]
メソト・マンスリー 今月のメソトの様子をお知らせします。	
・ ビルマ奥地の、人と知識のネットワーク (米田 哲)	[3]
・ メータオ・クリニックでの日々 (齊藤 信夫)	[5]
国内から (加藤 好美)	
・ 一連のつながり (現在・過去・未来)	[7]
編集後記	[8]
次号の予定	[9]



ミャンマー／ビルマ難民 緊急救援基金開設のお知らせ

2010年11月7日総選挙が行われたミャンマー／ビルマ。

その東部カレン州に位置するタイ国境地域では
反軍政を掲げる少数民族の武装勢力とミャンマー／ビルマ国軍が交戦する事態となり、
戦闘を逃れた1万人以上もの難民がタイ側へ流入しています。

メータオ・クリニックでは
11月8日859人、9日には659人の被災者の方々に食糧を提供いたしました。
また被災者約200人がクリニックの外で避難し寝泊りをしており、
約200人が職員とともに滞在しています。

さらに国境沿いのキャンプやそのコミュニティーに
5000人分の食糧、水、子ども服、生理用品を提供しました。

国境沿いにある緊急設営された難民キャンプではクリニックのスタッフが直接診察に出向き、
また近隣の移民学校の生徒達も応急処置を行いました。
重病の患者はクリニックへ搬送されています。

今後もメータオ・クリニックではクリニックやその周辺の食糧や医療を必要とする多くの
人々に手を差し伸べていく予定です。
当会から、11月15日に35万円をクリニックに支援いたしました。食糧をはじめ生活
に必要なものが十分とはいえません。

**メータオ・クリニック支援の会ではメータオ・クリニックを通じて
戦火を逃れてきたミャンマー／ビルマ難民の方々に対して緊急救援基金
を開設します。**

皆様の温かいご支援をお待ちしております。

↓↓お振込先↓↓

銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900
店名：〇〇八店（ゼロゼロハチ店）
店番：008
預金種目：普通
口座番号：2577010

***通信欄にビルマ難民緊急募金とご明記ください。**



シンシア医師の本 発売中！

『タイ・ビルマ 国境の難民診療所—
女医シンシア・マウンの物語』

(新泉社、1800円)

全国の書店、またはアマゾン等で発売中です！！



当会が編集協力した『タイ・ビルマ国境の難民診療所—女医シンシア・マウンの物語』
(新泉社、定価 1800円) が発売中です。

本書は、当会の支援先であるメータオ・クリニックとその創始者シンシア・マウン医師に
焦点をあてたものです。

当会は、さまざまな現地情報の提供、スタッフの梶藍子看護師による体験記の収録等で協
力しました。

本書の印税は、当会を通してクリニックへ全額寄付されます。

メソト・マンスリー

今月のメータオ・クリニックの様子をお届けします。

ビルマ奥地の、
人と知識のネットワーク

【メソト (タイ北西部) = 米田 哲】



10月の下旬から11月上旬にかけて、ミ
ャンマー (ビルマ) 奥地の少数民族が住ん
でいる地域で働いている医療スタッフが、
年に一度メータオ・クリニックに集まって
きて、様々な分野で講義やトレーニングを
受けるという、いわば合宿のようなものが
ありました。

メータオ・クリニックに受診に来る人た
ちは、主にビルマ人とカレン人という民族
ですが、ビルマの奥地には、他にもカヤン、
カイン、シャン、モン、その他多くの民族
が住んでいます。その多くが、ミャンマー
軍事政権と対立していたり、和解していた
としても十分な医療サービスを受けるこ
とが難しいままで放置されています。



メータオ・クリニックのあるタイのメソトから各地域までは非常に遠いため、患者さんはここまで来ることはできません。また、メータオ・クリニックのスタッフが「往診」に通い続けることも非現実的です。

そこで、現地の医療スタッフをトレーニングして、さらにそのスタッフが地元に戻って多くのスタッフを養成して・・・という流れで、各地域でそこに住む人たちが自分たちで診療所を開いたり、衛生環境を改善して病気の予防に努めたり、といった活動を行い、メータオ・クリニックがその活動を支援する、という形をとっています。

今回の講義は、その支援の一環で、年に一回、各民族から数名ずつ医療スタッフを呼んで、集中講座を行い、知識の維持・向上を図る、というものでした。

自分は、「生まれたばかりの赤ちゃんから5歳までの子供の診療について」という、広大な範囲の講義を頼まれ、朝から晩まで、丸一日かけて、12人のスタッフに講義を行いました。

薬も医療器具も非常に限られた環境で、しかし大きな病院には遠くて道が悪いから連れて行けない、そんな大変な環境のなかで、どのように重要な病気を診断し、あるいは診断できなくても、とりあえずどのように対処すればよいか、非常に難しい問題です。

生まれたばかりの赤ちゃんから5歳児までの病気について話をするだけでも大変なのに、そんな特殊な（でも彼らには日常

的な）環境の話だなんて、正直想像もできなかったし、これまでろくに勉強したことがなかったので、毎日仕事が終わった後に1週間かけて資料を集め、何日もろくに眠らず目を通し、前日はもちろん徹夜、という、まるで自分が試験を受けるんじゃないか、という勢いで勉強しました。でも、一心不乱に（別の言葉で言うと、切羽詰って）勉強していると、これまでの知識と経験をもとに、全く未知の世界に足を踏み入れて探検するような、そんな気分になることができ、刺激に満ちた、興味深い経験ができました。

講義では、産科病棟の美人助産師が僕のつたない英語をきれいなビルマ語に訳してくれて、受講生の皆さんも、同じくつたない英語で書いたスライドを必死に読んで講義に参加してくれて、とってもうれしかったです。

講義の中で、彼女たちが普段の日常診療で疑問に感じていたことをたくさん質問してくれて、講義も盛り上がりました。

人に教えるということが一番勉強になるとどの世界でも言いますが、まさにその通りの講義になりました。

この原稿を書いている現在（11月3日）国境は嚴重に封鎖され、多くの人が行き来がこの7～9月よりさらに厳しくなり、事実上不可能に近い状態です。

そんな状況でも、彼女たち現地のスタッフがそれぞれの地域で活躍して、少しでも医療状態が改善することを願ってやみません。



(写真：講義の様子)

メータオ・クリニックでの日々

【メソト（タイ北西部）＝齊藤 信夫】

メータオ・クリニックに来て一カ月が経過しようとしています。内科病棟で毎日忙しく働いています。

実は、こちらに来る前は、自分にできる事はあまりないのではないのだろうか、心配に思っていました。

しかし、実際にこちらに来て働きだしてみると、沢山のやるべき事がたくさんあり、やりがいを感じています。

深夜バスで来てその朝より、診療がはじまりました。来てすぐに、症例の相談があり、髄液穿刺をすることになりました。その後にも腹部の超音波検査を2例頼まれました。

今では、メディックにも信頼され、多くの患者を彼らと一緒に診ていっています。

主な活動は内科病棟での患者の診察、治療です。

このメディックは皆、勤勉で一生懸命働くのですが、きちんと診断ができるメディックの数は限られています。

内科病棟では2人の優秀なシニアメディック（日本の医師とも引けをとらない）と、なんとか診断ができるレベルのシニアメディックが6～8人くらいです。あとは若手のメディックが20人程います。3交代で行われるので、各勤務にきちんと診断のできるメディックはそれ程いません。

50床の病棟を一通りまわり、難しい症例をシニアメディック達と一緒にディスカッションしながら検討していくのが僕の仕事です。

その他には感染症、内科疾患の講義です。なるべくわかりやすく、こちらのガイドラインに沿ったやり方で教えようと思っています。

最近、検査技師のVIXS（オーストラリア人）と一緒に細菌検査のグラム染色と寄生虫検査の便検査の導入を検討しています。

検査技師に検査の仕方を教え、メディックにどういうときにこれらの検査が有用か教えていくつもりです。

また、ここには携帯超音波装置があります。超音波検査はどこでも手軽に行える検査で非常に有用です。特に膿瘍形成の診断などでは大きな力となります。

しかし、僕と米田先生が赴任前にはまったく使われていませんでした。

超音波検査の仕方を彼らに教え、赴任中に彼らが使えるようにしたいと考えています。

1カ月経過した感想としては、多種多様な感染症を経験し、感染症科医としてやりがいを感じています。

HIV感染症と結核は世界中で問題となっていますが、実際に働いてみて、この辺りでも、大きな問題であると感じています。

しかし、HIV感染症と活動性結核の治療が当院ではできず、診断はしたが、その後の方針が起らないケースがあり非常に困っています。

今まではメータオ・クリニックからMSF（国境なき医師団）に治療をお願いしましたが、MSFがメソトより撤退したため、すでに抗HIV治療が開始されている患者のみ、メータオ・クリニックでフォローしていくことが決まり、11月より外来治療を開始しています（抗HIV薬はタイ政府より支給）。

この外来に僕も加わっています。新規登録はできませんが、まずはこのHIV外来を軌道に乗せ、今後HIV治療を拡充できればと思っています。



本日(11月7日)選挙が行われましたが、こちらの状況は特に変わりありません。外来患者が少し減ったようですが、入院患者は相変わらず多いです。メディックも特に関心がなさそうです。

メソトの生活は楽しいです。田舎でのほほんとした生活を送っています。食事は美味しいし、言う事ないです。週2回メディック達と一緒にサッカーを楽しんでいます。



(写真:内科主任のタイタイとJAMのTシャツを着て)



(写真:メディックたちとサッカー)

国内から

一連のつながり (現在・過去・未来)

【東京＝加藤 好美】

今の仕事

いつも JAM を支援してくださり、ありがとうございます。みなさんの温かい支援のおかげで、今の JAM があります。心より感謝しています。

私は、今 JAM の中で会計と学校保健に関わらせて頂いています。JAM つながりで、素敵な縁を頂き、JAM 代表が務めている国立国際医療研究センターの国際医療協力部に非常勤として働いています。こちらの研究センターには、国際保健専門家の方々がたくさん所属されており、海外でご活躍されている方たちがたくさんいらっしゃいます。その方たちが帰国をされると報告会をされたり、海外の方を招いて講演会をひらいたりしています。

こちらで日々働かせて頂きながら、勉強をさせてもらっています。国際協力に興味があって、国際協力の人たちはどんなことをしているのかな？と思っている方もきっと、いらっしゃると思います。そこで、少し私の仕事内容をご紹介します。

報告会などは一般の方々に公開されていることがありますので、国際保健に興味がある方は、ホームページをご覧になってみてください。http://www.ncgm.go.jp/kyokuhp/seminar/

少し前の仕事

10月25日～10月27日「ダイエットに関するアンケート」調査のために沖縄に行ってきました。なぜ、国際協力なのに沖縄なの？と不思議に思われる方も、いらっしゃるかと思います。今回の調査は、東京大学大学院で国際地域保健を勉強されているミャンマーの女医さんの研究補佐のために、沖縄に同行しました。

今回の調査の目的は、女子中高生のダイエットに関する考えや行動を調べるためです。第二次成長をする思春期にダイエットを行うと、成長に必要な栄養素が身体に入らず、第二次成長に悪影響することが考えられます。なぜダイエットを行うのか？その要因は何かを調査するために、アンケートを実施しました。

ミャンマーでは、女子中高生がダイエットをすることが少ないようです。想えば、私は女子中高生の時からダイエットに興味がありました。国が違えば、やはりダイエットに関する考え方にも違いが出てきます。今回のアンケート結果がどのようになるか楽しみです。

このお仕事に関わらせて頂いて、日本の異文化の中で日本語を駆使しながら、一生懸命に学問に取り組む彼女の姿に心が洗われました。これからも、日本で頑張っている海外の人達と交流を図っていかれたらと思います。第三国永住でミャンマーの方々も日本にきています。これから、その動向をみていきたいと思っています。

少し後の仕事

11月20日～12月25日「ニジェールの学校保健について」調査するためにニジェー



ルに行ってきます。2007年よりニジェールの小学校では、タイの移民学校でも使用されている「学校保健自己評価表」をニジェールの状況に合わせた内容に改善し、一部の地域に導入がされました。「学校保健自己評価表」は、各学校の先生たちが、自分の学校チェックを行い、その状況を改善できるように開発されたものです。

今回の調査の目的は、「学校保健自己評価表」が継続的に使用されているか、学校の先生たちなどに集まってもらいお話を聞き、継続性・有効性・今後の効率的なシステムなどを検討するために調査に行ってきます。

2005年～2007年青年海外協力隊で看護師として、ニジェールの学校保健活動に関わらせて頂きました。ふたたび、ニジェールに仕事で行かせて頂けることになり、とてもうれしく思っています。ニジェールの学校保健については、次回の会報などでお知らせができればと思います。

つながり

今、私がここでお仕事をさせて頂けるのは、JAM 代表に出会えたおかげです。そして、その代表に会わせてくれたのは、JAM メンバーの友人でした。色々な人たちと素敵な縁ができて、またニジェールの人たちと縁をつなぐことができました。これからも縁を大切にしていきたいと思えます。

今、JAM がこうして NGO の活動することができているのは、支援をして下さるみなさんのおかげです。みなさんのおかげで、今回35万円の寄付をメータオ・クリニックにすることができました。お顔を知らない方もたくさんいらっしゃいますが、これからも、みなさんとの縁を大切にしながら、JAM の活動をさせて頂きたいと考えています。これからも温かくご支援を頂けるとありがたく思えます。よろしくお願い致します。

編集後記

現地にいる米田医師、齊藤医師から今月の原稿が届いた直後。
日本人ジャーナリストがビルマ政府に身柄を拘束されたニュースが流れました。

見たことある景色。

それは、クリニックの近くの国境の映像でした。
そして彼は、
以前、日本テレビ「ニュースZERO」でメータオ・クリニックが取材を受けたときに
現地で当会の梶看護師が会っていた方でした。

今回の騒動でけがをした人はメータオ・クリニックに運ばれては来るものの、タイ政府との間で少し離れたところにあるメソト病院に送るように決められているそうです。
ですが、メソト病院に送られても、タイ語を話せない患者さんたちは、メータオ・クリニックに戻ってくるということでした。

クリニックを頼って避難してきた人々は、1000名を軽く超えています。
さらに国境沿いのキャンプやそのコミュニティーにも、約5000人分の食糧、水、子ども服、



